

大友家代々繁栄の土台を築いた中国・朝鮮との貿易に加え、宗麟の時代から、ポルトガルとの貿易が始まります。府内に訪れた異国の貿易商が捧げる朝夕の祈りは若き日の宗麟の興味を惹きつけました。西洋文化の受容に積極的であった宗麟が勢力を誇っていた頃、豊後府内で南蛮文化が開花しました。

博愛精神で西洋医学を豊後府内に

アルメイダ

1525年〜1583年



外科医の免許を受けた後、貿易商人として来日

ポルトガル・リスボン生まれのアルメイダは、医学を修めた後に貿易商としてインドへ赴き、中国産の生糸を日本に持ち込む交易で若くして財を成します。

1555年、日本の平戸に上陸。農民層の飢えと疫病の流行や生活苦などに衝撃を受け、貧しい人々を救おうと決意します。



1557年に建てられた、日本で初めての西洋式病院。内科、外科、皮膚病科などからなり、当時の西洋の最新医学によって目覚ましい治療効果をあげたといわれています。(撮影協力：大分市医師会立アルメイダ病院)

孤児院や西洋式病院を創設 西洋医学を施す

府内に赴いて宗麟と対面し、1557年、宗麟が与えた府内の一角に自らの資産を提供して孤児院と日本初の西洋式病院「府内病院」を創設。南蛮医学による治療を施し、日本で初めての外科手術をアルメイダ自らが担当しました。彼の噂を聞きつけ、当時、関東や東北からも多くの患者が訪れたそうです。また、日本人の助手を使っている外科手術や医学の教育、巡回診療なども行い、その医学を伝えたといわれています。

貧しい人々に対して無料で治療した府内病院は評判を呼びました。アルメイダの府内での活動はイエズス会が宣教師の医療への関与を禁じた1562年まで続きました。その後九州各地を訪れるなど精力的に活動しましたが、体調を崩し、1583年に天草で生涯を閉じました。



府内病院の場所は現在の顕徳町あたりと推定されています。



インタビュ

赤神 諒

Ryo Akagami

大友の家臣は「書きたい」という感情が燃え立つほど魅力的な人物や事件を題材にした小説はすでに世の中にあふれています。それならば、人が書いていない、人に知ってほしい、そんな人物を描きたいと思ったのが執筆のきっかけです。

大友の家督争いを当時の重臣、吉弘兄弟を通して描いた本格歴史小説『大友二階崩れ』の作者、赤神諒さん。今年4月に立花道雪を主人公にした『戦神』を出版、7月には妙林尼の目線から描いた作品を発表予定です。

大友宗麟の家臣を題材にしようと思ったきっかけや、その時代を生きる人物の魅力と面白さを聞きました。

大友宗麟の存在は知っていましたが、大友家を調べていくと、宗麟の周囲にいた人々がとても魅力的で、あれもこれも書きたいと思うほど面白かった。長編小説を書くというのは「一万个の壁を破る作業」です。とても大変で辛いこともありますが、それを超えるほどの「書きたい」という情熱がなければ到底書き上げられ

平家のような栄枯盛衰があり、多くの英雄が登場した

大友家の詳細は知らなくても、平家物語を知っている人は多いですよ。大友家は九州の大半を制した大名だった時代があるのですから、そこにはもちろん、平家のような栄枯盛衰があり、裏切る者もいれば最後



まで忠義を尽くす者もいる。さらに、多くの女性たちも活躍していました。今年の夏に出版予定の小説は妙林尼という女性を題材にしていますが、彼女は薩摩島津軍を16回も撃退したという女武将で、まさに女傑。そんな英雄がたくさん現れた時代であり、九州版の平家物語だと私は思っています。私の小説が、歴史を楽しみ入り口になり、大分の皆さんが郷土への誇りに感じてもらえればうれしいですね。



1972年京都市生まれ。法学博士、弁護士、大学教員。『義と愛と』(『大友二階崩れ』に改題)で第9回日経小説大賞を受賞しデビュー。最新刊は立花道雪を主人公にした『戦神(いくさがみ)』。7月には妙林尼を主人公にした作品を発表予定。